様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３２６

研究課題名（和文）丹緑本の基礎的研究

研究課題名（英文）The foundamental research of Tanrokubon

研究代表者
石川　透（Ishikawa, Toru）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：３０２１１７２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　丹緑本とは、江戸時代初期に制作された版本に彩色を施した絵本群のことである。その国内外に存在する伝本を調査研究する予定であったが、残念ながら2019年度末から流行した新型コロナ感染症の影響を受け、国内外の調査はほとんどできなくなってしまった。研究期間を２年延長したが、予定した海外調査のほとんどは、実現できなかった。しかし、国内での調査や既に所持している画像での研究は進めることができた。その結果、最も大きな謎であった、丹緑奈良絵と呼ばれる、御伽文庫の初版は、後世の塗り絵ではなく、版本制作時に、制作業者によって色付けされたものと推測できるようになった。その版本を元に御伽文庫本が量産されたのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　新型コロナ感染症の影響を大きく受け、原本調査はあまり進められなかったが、丹緑奈良絵と呼ばれる丹緑本が、御伽文庫本と同じ版本を使用していたことを明らかにできたのは、今後の研究に大きな意味を持つ。従来、御伽文庫本は、その刊記の存在から、江戸時代中期に心斎橋の渋川清右衛門によって刊行されたと考えられてきた。しかし、それより七十年ほど前に、既に版木は作られていたことになり、御伽草子の流行期に近い時点で出版されていたことになるのである。その初版を出版したのも、渋川清右衛門の先祖ということも考えられ、丹緑本のみの研究ではなく、江戸時代の出版文化史の研究との比較が重要になってきたのである。

研究成果の概要（英文）：Tanrokubon is a matter of group of picture books which gave the edition book produced in the early stages of the Edo Period coloring. The influence of the new-model corona infectious disease which investigates original book which exists outside that country and which was intended to be researched and which, sorry to say, spread from the end 2019 was taken, and investigation outside the country couldn't be almost done any more. Most of the overseas investigation scheduled though a research period was extended for two years couldn't be realized. But, it could proceed with the investigation in the country and the research with the image which it already has. The first edition of Otogibunko called Tanroku-Narae which was the biggest mystery was not the line drawing for coloring of the future, but it learned to guess what was colored it by a production dealer at the time of the edition this production as that result. Otogibunko-bon was mass-produced in the cause.

研究分野：人文学

キーワード：丹緑本　江戸時代前期　版本　奈良絵本・絵巻　御伽文庫

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

丹緑本とは、江戸時代初期に制作された版本に彩色を施した絵本群のことである。その国内外に存在する伝本の総合的な調査研究は、ほとんど行われていなかった。その基本的な伝本の整理は、偽物の存在も明らかにすると思われていた。丹緑本は、高価で取引されることから、偽物が多く作られたと考えられている。また、御伽文庫本という江戸時代中期に多く印刷された資料によく似た、しかも彩色が施された丹緑奈良絵と呼ばれる資料が存在し、御伽文庫本の初版ではないかとも言われている。丹緑本にまつわるこれらの疑問を解決するために、基礎的な研究を行う必要があったのである。

２．研究の目的

最初に、国内外に残されている丹緑本とされている伝本を所蔵機関に赴き調査をする。所蔵機関から許可が下りれば撮影を行い、そのデータを収集する。基本的には、この作業を繰り返し、これまで撮影していた多くのデータを含めて、その本物と偽物の判別を行う。また、丹緑奈良絵については、どのように制作されているかを、版木が同一かどうかも含めて詳細に研究する。さらには、丹緑本の総合的な伝本所在状況を、目録を作成することによって明らかにすることを、最終的な目的とした。

３．研究の方法

国内外各地に赴き、直接伝本の調査を行うことが基本である。そして、許可が下りれば、できるかぎり丁寧に撮影し、そのデータを研究室に持ち帰り、ハードディスクに保管する。その基本的な調査を各地で繰り返し行うこととする。また、これまで集めていたデータやネット上に公開された丹緑本のデータも含めて、同じ題名の作品をパソコン画面上で比較して、その相違を比較すると、本来的な姿が明らかになると思われる。丹緑本の伝本は、御伽草子や幸若舞曲、さらには、軍記物語等に、ある程度限定されている。御伽草子の名前の元となったとされている御伽文庫の丹緑本（丹緑奈良絵）を含めて、数多くの情報を集めることとする。

４．研究成果

国内外における丹緑本の伝本調査は、初年度はできたが、2019 年度末の調査を本格化しようとした矢先に新型コロナ感染症による影響で、全く行えなくなってしまった。多くの研究者がその影響を受けたであろうが、内外の伝本調査への影響は最も大きいものになってしまった。よく、画像データを所蔵機関から送ってもらえばよいと思われがちだが、丹緑本というほとんど知られていない作品群は現地で探し出すことが難しく、もし画像が送られてきても、明らかな塗り絵の作品であったりするのである。また、本物か偽物かを考えるに

は、直接的に見て調査を行う必要があったのである。

このような状況から、伝本の悉皆調査とその分類は、あきらめざるをえず、研究の中心は、丹緑奈良絵と御伽文庫本との比較を行い、その関係を明らかにすることとした。丹緑奈良絵は、横型奈良絵本と類似している。したがって、御伽文庫本と比較する前に、奈良絵本との関係を考え直す必要がある。

奈良絵本は、これまで、研究代表者が科研費を使用して、多角度からの研究を行っており、画像データ等の基礎的な資料は十分にあったので、それらと比較したのである。基本的には、丹緑奈良絵は版本に彩色した作品、奈良絵本は全て手で作り彩色した作品である。すると、両者の紙質が問題となった。丹緑奈良絵は、全て間似合紙という種類であるが、それは１７世紀後半に制作された横型奈良絵本と一致したである。ちなみに、横型奈良絵本は、１７世紀前半にも数多く制作されており、それらの紙質は雁皮紙だったのである。ということは、丹緑奈良絵は、１７世紀後半に制作された可能性が出てくる。

また、御伽文庫本は、彩色のない普通の横型の版本で、享保年間に大量に印刷された作品である。御伽文庫には、心斎橋の本屋である渋川清右衛門の刊記があることから、江戸時代中期に大阪で刊行された叢書と考えられていた。しかし、御伽草子の流行期は、江戸時代前期であることから、違和感があったのである。

そこで、あらためて、御伽文庫本の筆跡を調べると、その筆跡は１７世紀半ばによくみられる筆跡であったのである。版本の筆跡は彫師による作業が加わるので、鑑定には使えないとの見方もあるが、日本の彫師の力量は、その初期からレベルが高く、筆跡鑑定に十分に使えることは、研究代表者が以前から論じていたところである。

となると、御伽文庫本の版木は、１７世紀半ば頃に制作されたことが明らかである。これならば、御伽草子の流行期と重なり、違和感がなくなるのである。渋川清右衛門が刊行していたのは、初版から七十年近く経た再版だったのである。丹緑奈良絵は、その印面から、最も古い初版に近いものと推測できる。

したがって、横型奈良絵本が雁皮紙から間似合紙へと移り変わる、その過渡期に御伽文庫本の初版が作られ、それが丹緑奈良絵である可能性が大きくなったのである。

以上のような、丹緑本の一種である丹緑奈良絵について、研究を進めることができたのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 石川　透	４．巻 1101
２．論文標題 奈良絵本・絵巻の研究と収集（１９）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本古書通信	６．最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川透	４．巻 69-7
２．論文標題 文献としての奈良絵本・絵巻	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本文学	６．最初と最後の頁 12-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川透	４．巻 1084号
２．論文標題 奈良絵本・絵巻の研究と収集（２）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本古書通信	６．最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川透	４．巻 3巻
２．論文標題 軍記物語とその絵画化	５．発行年 2019年
３．雑誌名 軍記物語講座	６．最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 石川透
2．発表標題 『御曹司島渡』と『ガリバー旅行記』との関係について
3．学会等名 奈良絵本・絵巻国際会議
4．発表年 2019年

1．発表者名 柳沢昌紀
2．発表標題 舞の本『常盤問答』『笛巻』の挿絵
3．学会等名 奈良絵本・絵巻国際会議2018年度大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 石川透
2．発表標題 奈良絵本は面白い
3．学会等名 日比谷コンベンションホール講演会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 石川透	4．発行年 2019年
2．出版社 奈良絵本・絵巻国際会議	5．総ページ数 32
3．書名 奈良絵本を見る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関